

幕末・維新时期における日蓮伝記本の一考察

— 小川泰堂著『日蓮大士真実伝』を中心に —

望 月 真 澄

はじめに

近世に高揚した日蓮宗の開祖日蓮を崇拜する祖師信仰は止むことなく、近代に入っても継承されていく。この祖師信仰を人々に伝えるひとつの方法として伝記があり、その記載内容は、祖師の教義や生涯を知る手段として活用されている。そこには、祖師の生涯における事蹟が編年的に描かれるが、著者が強調したい場面や祖師の霊性等が反映される。よって、内容は史実ばかりでなく、伝承や祖師にまつわる事項も多く取り入れられている。特に、祖師滅後、時代が経つにつれて作成された伝記は、過去に刊行された伝記本に依拠しつつも、作者の作成意図や伝記が作成された時代によって内容に特徴がみられる。

日蓮伝記本は、日蓮滅後に作成されるが、祖師信仰が高揚していく近世という時代に多く作成された。そして、祖師信仰が爆発的に高まりをみせる幕末・維新时期の伝記には、祖師

の霊性や奇瑞を強調した伝記本がみられるようになる⁽¹⁾。その中でも、小川泰堂著の『日蓮大士真実伝』(以下、『真実伝』と略称)は慶応三年(一八六七)に初版が刊行され、明治から昭和時代に入っても版を重ね、それぞれの時代のベストセラーとなつて⁽²⁾いる。この書が何故読まれたのか。幕末・維新时期といった社会変動の時期に作成された時代背景を踏まえ、過去の日蓮伝記の中でも、特に取り上げられた場面を検討し、祖師に対する著者の信仰や著者が描いた日蓮伝記の世界について考察を加えてみたい。

一 『真実伝』の概要

著者の小川泰堂は、文化十一年(一八一四)に神奈川藤沢に医者の子として生まれ、⁽³⁾明治十一年(一八七八)十二月二十五日に六十五歳で逝去した。誰にでもわかり易いという主旨のもとに日蓮の伝記を集大成し、各地の伝説までも細かく調べ、まとめ上げた絵入りの『真実伝』(木版刷五卷)を慶

応三年(一八六七)に刊行している。これに先だつ慶応元年から日蓮遺文を体系化した『高祖遺文録』⁽⁴⁾を刊行しているが、これは以後の遺文集の基礎となり、近代における日蓮像をつくりあげる原型になっている。当然のことながら、『真実伝』もこの影響を受けていると考えられる。

『真実伝』の特徴について、『日蓮宗事典』⁽⁵⁾には、それまで出された日蓮伝記を元にしつつ、日蓮の足跡と起居動作を明らかにしたもので、文と画の一体さと語りによる表現を駆使したことから、日蓮伝の啓蒙普及に大きな役割を果たし、その後の日蓮を主人公とした戯曲等の種本となったといわれている。

そこで、本書の性格を知るために本文冒頭の凡例をみてみると次のように記されている。

一 日蓮大士一代の事蹟は行学院日朝聖人の化導記、円妙澄師の註画讚、また日省師の高祖伝、六牙潮師の別頭統紀、健立玄得二公の高祖年譜、これらに至って善尽し美を尽すといへども、其文高く其旨遠くして、在家の不眼には其善美読み解けがたし。又御伝記、御一代記、紀年録等の仮名書あり。其は読み易けれども、事実に委しからず。(後略)⁽⁶⁾

いわゆる代表的な日蓮伝記として、行学院日朝の『元祖化導記』、円妙日澄の『日蓮聖人註画讚』、また身延久遠寺三十二世日省の『高祖伝』、同三十六世日潮の『本化別頭仏祖統紀』、健立玄得二公の『高祖年譜』があるとしている。

しかしながら、これらの伝記は、一般の人々には読み解きがたく、一方『日蓮聖人御伝記』・『日蓮聖人御一代記』・『本化高祖紀年録』は仮名書きであるが、日蓮伝の事象において問題があると指摘している。

これに関係して、前の凡例に続く箇条書きをみると、

一 宗教宗教の法問は一宗門の大事にして茲に尽すべきにあらず。(中略) 又数ヶ所問答法論は、これぞ弘経の骨髓、微細をつくすべき事なれども一二の宗論に滞りて、御伝の意の疎薄にならん事を思ひ、唯その論條を録して、委曲なることは其問答の記録にゆづる。又御一代記の中に、小室に法力を競べ普門の伊豆に訪ひ、日輪の中に不動を拝み給ふなど、正法もとより不思議なりと雖も、其奇怪変態に過ぎて宗門の法則に合ざる事は置いて論ぜず漏れたるにあらず、載せざるなり。又巻中仮名づかひは古振に違ふべからずといへども、古言舌に馴れず。女兒に便ならざるゆゑ、俗通に従ふ処あり画も亦しかり。古代の風姿真格の画法のみにては、観る者眼に飽かん事を察し、趣きを当世に写すあり。識者領會すべし。

と宗論や奇怪なこと、仮名遣いのことに関して凡例が示されている。問答に関しては、問答の記録類に詳細に記されているので譲り、一代記の中で不思議なことである奇怪・変態なことは載せていない、仮名遣いは現在使用されているものに従う、といった点が近世後期の他の日蓮伝記と違った編集姿勢といえる。本文の末尾には、

選者曰、祖書録内録外結集の事は別に評論あれども、此書は唯古来の伝説を折衷し御一代の編作を旨とするなれば、結集の一事は世間普通の説に任すのみ。読者遺憾と為すこと勿れ。

日蓮真實伝五之巻終(大尾)

とあるように、過去の日蓮伝説を折衷し、世間の通説のみ示すという編集方針をとっていたことがわかる。さらに、凡例を詳しくみてみると、

一 大士の徒弟六老僧又中老十八師等、その余の末師、帰依の男女、又は一時結縁の輩など、此等を単に本文に書きなせば、読み訳がたきを以て、其本伝より一段低くこれを別記して、其名跡靈場まで本文に混ぜざるやう明弁す。

とあり、日蓮の弟子・信徒等に関しては本文に入れると読みにくいので、本文より一段低くして記している点が特徴といえる。

次に、これらのことを受けて、過去に作成された他の日蓮伝記と『真實伝』の記載事項のどこが違うのか、目次の構成、注のつけ方、挿絵といった点に絞って考察してみたい。

二 『真實伝』の構成

『真實伝』の内容をみる前に、近世の刊本による主な和文体の日蓮伝記を列挙してみると、次のようである。

① 『日蓮聖人註画讃』寛永九年(一六三二)刊、円明院日澄著

幕末・維新时期における日蓮伝記本の一考察(望月)

※刊本漢文体の初版は慶長六年

② 『日蓮聖人御伝記』延宝九年(一六八二)刊、作者未詳

③ 『本化高祖紀年録』寛政五年(一七九三)刊、深見要言著

④ 『日蓮上人一代図会』安政五年(一八五八)刊、中村経年著

⑤ 『日蓮大士真實伝』慶応三年(一八六七)刊、小川泰堂著

『真實伝』は、五巻の構成であるため、生涯を五つの段階で区切っており、一般の日蓮伝記とほとんど同じ構成となっている。各巻のはじめには、その巻の全体像が記されている。よって参考に、巻別の年齢区分をみると、次のようである。

一巻 貞応元年(一二二二)～建長二年(一二五〇)

一～二十九歳 三〇年間

二巻 建長三年(一二五二)～康元元年(一二五六)

三〇～三十五歳 六年間

三巻 正嘉元年(一二五七)～文永四年(一二六七)

三六～四六歳 一一年間

四巻 文永五年(一二六八)～文永一〇年(一二七三)

四七～五二歳 六年間

五巻 文永一一年(一二七四)～弘安五年(一二八二)

五三～六一歳 九年間

諸本の刊行についてみると、明治二十年(一八八七)に東京銀花社から再版されて以来、平楽寺版、師子王文庫版、錦正社版など昭和期にいたるまで、およそ二十種にわたって刊行されたロングセラーであるといわれている。

次に、『真実伝』の構成について、巻数別の内容、挿絵、場面等についてみてみよう。

まず、本文の構成について、本文冒頭部分を紹介してみると次のようである。

一天雲尽きて日月淨く、四海風収まって萬邦寧からぬ例はあらじ。茲にかしこくも本地四八の妙相を韜し、日本国東海に応生し、末法万年の闇を照らし給ふ①日蓮大士、俗姓の先蹟を遠く考ふれば天津兒屋根の神裔にして、皇極帝の御時、入鹿父子の悪逆を伐つて天下の静謐を奏したる正二位内大臣鎌足より十二代の正嫡、備中守共資、②正暦の元年夏の頃京都を去つて、遠江国村櫛といへる里に住居せしに、其軀男子なき事を嘆き、神にその伝統の冥助を祈ること久し。③寛弘七年庚戌の正月元日、同国引佐郡井谷明神に参詣し、神前に祈誓を凝しける時、祠の前瑞垣のほとりに稚兒の啼声す。共資あやしみて立ち出で見るに、廬橋の樹のもと筒井のほとりに綾の衣に包裹みたる、いと美しき嬰兒あり。抱き揚げてこれを観るに、氣高き男子にて、眼の光初空の旭日にかがやき、尋常ならぬ稚兒にありければ、共資はこれぞ神の賜ならんと、懐き帰りて我が子として此をいつくしみ養ひけるが、成長に従ひ雄力猛く智慧も亦萬人に勝れたり。④共資我が女を配合せて備中大夫共保と呼び、初めて姓を井伊と名乗り、彼の神前の奇瑞を以て井桁に廬橋を家の紋所と定めけり。かくて共保の子備中次郎共家其子九郎共直、その子新太夫惟直の子を赤佐太郎盛直といふ。⑤盛直に三人の子あり。嫡子は次郎良直、次は三郎俊直、次は貫名四郎政直、同国山名郡貫名に領居するゆえ、貫名を以て姓とす。これ日蓮大士の祖先也。（傍線は筆者）

①から④の傍線が本文に付してあるが、その部分が本文の

特徴をみる上で注目できる箇所である。これは、

①日蓮誕生の節を記す。節全体の内容

②正暦元年夏京都から遠江村櫛へ移転したこと。年号はあるが月日不詳のため記されない。⁽⁷⁾

③寛弘七年正月元日引佐郡井谷明神に参詣したこと。年月日が記され、事項となる。

④井伊共資の家族を紹介。該当する人物について述べる内容といったように、節の目次、事項（年月日が判明する場合とそうでない場合）、人物や事件・出来事等といった種別によって内容が区別されている。

次に本文の巻ごとの目次の構成をみると、全五巻の内一巻から四巻が二十一章、五巻が二十章、全百五章立てとなっている。伝記ということ、当然のことながら日蓮に直接関わる内容が主となるが、日蓮の弟子や檀越関係、世の中の動向・天変地異といった出来事などが記されている。この検討はあくまで目次であり、各章の内容をすべて反映されているわけではないが、著者の意図する伝記編集の傾向がうかがえる。一巻の冒頭部分を例にとると、一章から四章が誕生に関わる内容、五章が幼少時代のこと、六章が天変地異のことといったように、目次から各章の内容を知ることができる。

次に、注釈の箇所をすべて掲げてみると、全二十六カ所の内、三巻の十三カ所と多いのと一巻と五巻の一点が極端に少

ないといった、註は均等に付けられていない傾向にある。そこで、「清澄寺」の註部分を挙げてみると、

清澄寺は千光山と号す。宝龜二年不思議律師の開基にして、慈覺大師これが中興たり。いま寺録八十石、東寺流の真言に属す。本尊虚空藏菩薩は、開山律師の靈作なりとぞ。此山は宗祖大士初發心の靈地にして、此寺に修学ありし事七年に及ぶ。悲母梅菊が愛別の涙を濯ぎし涕淚石、普光天子の影を宿したる明星が池あり。凡体の血を濯ぎたる処には、その地に生ずる笹の葉に血の染みたる斑あり。今に凡血の笹といひ伝ふ。まことに当山は大法基元の靈地とぞ思はれける。(傍線は筆者)

とあるように、虚空藏菩薩、涕淚石、明星が池、凡血の笹といった清澄寺に伝わる日蓮伝説が注釈され、簡単な解説がほどこされている。

三 挿絵について

ここで各巻の挿絵に注目してみると、次のようである。

- 一卷 井谷明神参詣から高野山遊学までの二十一場面
 - 二巻 比企能本の儒仏から片瀬渡船場までの十六場面
 - 三巻 正嘉元年鎌倉大地震から富木氏問答までの二十場面
 - 四巻 鬻骸と売人から大曼茶羅図頭までの二十場面
 - 五巻 時宗佐渡赦免から身延納骨までの十八場面
- 挿絵は実に扉絵四場面、挿絵九十五場面の多くにわたり、管見する限り過去の日蓮伝記の挿絵数では最大である。この

幕末・維新时期における日蓮伝記本の一考察(望月)

中で従来の挿絵にみられないものは、①鎌倉辻説法、②松葉谷召捕、③大曼茶羅図頭、④奥の院両親追慕、⑤祖師身延納骨、の五つである。また、従来の挿絵にはあるものの見開き四頁(二帖)にわたっている図に蒙古襲来、祖師入滅があるが、これは量の多さから作者の見せたい二場面であると考えられる。

次に、挿絵の部分を近世の日蓮伝に描かれた他の挿絵と比較してみると、『真実伝』の挿絵の特徴は、①から⑤にあると考えられる。そこで、該当する本文の一部を抜き出してみると次のようである。

①鎌倉辻説法の場面 「高祖大士鎌倉小町の街より立て説法弘通」

大法將日蓮大士は、日に日に辻町の東小町往還の路に立ちて、往来の人の足を駐め、年仏は無間地獄の業因よ、禪宗は天魔の邪法、真言は国を滅ぼす大悪法、律は国の賊なりと、声を限りに喚ばはり給ひ、末法当今の衆生の為には、南無妙法蓮華經の外助かるべき正法なしと、御経を巻返し繰返し、説き示し給へば、流るる水を塞ぐが如く、眠れる獅子を擲つが如く、立集ふ僧俗男女黒山の如く眼を怒らし、牙を咬み悪口過言をするもあり。氣の狂ひたる痴者なりと笑ふもあり。

念仏無間から律国賊の四箇格言を用いて、日蓮の宗教者としてのカリスマ性が強調され、罵声を浴びながら辻に立つて不特定多数の人々に布教している姿が如実にイメージされる

表現である。

②松葉谷召捕の場面 「鎌倉の奉行平の左衛門頼綱公命に依りて高祖を松葉が谷に捕ふ」

文永八年九月十二日、夕日も曇る申の刻、松葉谷の御庵室には、法弟檀方を聚め、高座に在りて説法真中、俄に轟く人馬の物音、外の方急度見渡し給へば、平左衛門馬上にて、数多の兵卒ひき纏ひ、砂を蹴立てて寄せ来り頼綱怒りの声荒らげ、やをれ日蓮、日頃の悪行その罪重く、今日死罪に行ふべしと、御館の嚴命なるぞと喚ばはるにぞ、堂に満ちたる群衆の参詣、上を下へと立騒ぐ。高祖大士は立像の釈尊と、法華經一部を手早く取つて、懷中に押入れ給ひ、縁鼻近く立ち出で給ひ、大将頼綱に向つて高声も宣ふやう、あら面白や、平左衛門、心の至らざるか、理の通ぜざるか。天下の奉行にありながら事の邪正も聞き訳ず。

挿絵では松葉谷庵室で日蓮が召し捕りにあう光景が目に浮かぶような表現である。一般の伝記の挿絵では、「龍口法難」の場面のみが掲載されるのが常である。しかし、召し捕りから牡丹餅供養、龍口の頸座処刑、行合川、赦免の場面の挿絵があり、泰堂が竜口法難の一連の出来事に注目していることが知られる。

③曼荼羅図頭の場面 「高祖大士佐渡が島において初て十界の曼荼羅を書顯し給ふ」

七月八日初めて大曼荼羅を書き著し給ふ。これを十回総帰命の御本尊とて、久遠の釈尊、五百塵点劫具する処の本尊にして、実相

の妙境なり。これ我等衆生、即身成仏の本尊にして、仏法滅後二千二百二十余年一閻浮提の内に、これまで決して顕れ給はぬ曼陀羅なり。高祖日蓮大士、一世の本懐ただ此本尊に限ること、彼の観心本尊抄も詳にして、これ一宗門の根元とこそ知られたれ。

挿絵では、佐渡の住まいで日蓮が曼荼羅を揮毫し、弟子と信徒が見守っている光景が描かれている。法華信仰の中で重要な場面であり、『観心本尊抄』と併せて信仰的な位置づけが行われている。

④奥の院両親追慕の場面 「高祖身延の山頂に登りて父母を追慕し東方を遙拝したまふ」

大士思はず御袖を絞り、故山の空なつかしく、両親の在せし昔を思ひ出て、しばし御経遊ばしけるが、此峰は御庵室より五十余町天の梯道もなき嶮岨なりしを、折々ここに登り、御両親の廟墓を遙拝し、追慕の泪を濯ぎ給ひける。大舜は五十にして父母を慕ふ。大士六十にして二親を恋ひさせ給ひき。内外両典もと二つなく、大聖至聖其道一つなりとぞ思はれける。此古蹟を奥の院と称し、今に思親閣育恩堂の名を残せり。

この場面は、「高祖身延山に閉居幽栖」図に頁が続いて描かれ、身延山での一連の話として続けて語られている。

⑤身延山へ遺骨安置の場面 「高祖大士の御尊骨を身延山に納め大法会修行」

御靈廟は旧身延山御庵室の地にして、八面の御堂のうちに御石碑

あり。銘は日昭聖人の御筆なり。又御真骨堂には水晶八角の玉の瓶の四方の四天王は後藤祐乘の彫にして、七宝の瓔珞、珊瑚の天蓋に莊嚴し、御真骨は鮮明に、そのうちに拜まれ給ふ。

この場面は、御真骨が身延山に納められたことを示す挿絵で、中央の御真骨安置の塔の周りを僧侶が廻って読経している姿が示される。いわゆる身延山納骨と身延山の信仰的な位置づけが記されている。

これらの五箇所は、近世の他の日蓮伝記には挿絵として画かれておらず、①に関しては他の日蓮伝記に具体的な記述がない。よって、泰堂は「辻説法」と「松葉谷召捕」から「龍口法難」に至る伝記の部分の二カ所を特に強調して記していることが読み取れる。特に、「辻説法」の記載は、この期の他の日蓮伝にはみられず、『眞実伝』において初めて挿絵入りで語られたことから、広く一般庶民に辻説法のこと知られるようになったと思われる。

最後に、泰堂の編集方針をみると、実際の日蓮霊跡を歩いて廻っており、本文末尾に、

選者曰、祖書録内録外結集の事は別に評論あれども、此書は唯古来の伝説を折衷し御一代の編作を旨とするなれば、結集の一事は世間普通の説に任すのみ。読者遺憾と為すこと勿れ。

とあるように、日蓮遺文の解釈を主としているが、録内御書・録外御書に収録された遺文の内容に問題はあることを指摘し

幕末・維新时期における日蓮伝記本の一考察(望月)

ている。そして、『眞実伝』は従来の伝記を折衷し、通説によるとしていることが、一般的な伝記として流布した理由のひとつといえよう。⁽⁸⁾

まとめに

本稿では、『日蓮大士眞実伝』の編集方針、全体の構成、挿絵の特徴等について検討してみた。しかしながら、分析は目次と挿絵に限ったもので、本文の内容解釈にまでは至っていない。挿絵に関しても、出版社によって掲載される挿絵数が異なっており、どれを掲載するのかによってその伝記の注目してもらいたい箇所が判明するものと思われる。よって、今後の研究課題としては、本書の内容分析を行うことはもちろんのこと、作者の編集方針、時代背景にまで言及していくことが必要とされる。さらには、「日蓮聖人註画讃」「高祖紀年録」「日蓮聖人一代図会」等をはじめとする近世の和文体による日蓮伝記の掲載場面を比較検討することによって、それぞれの伝記の特徴が明らかになるであろう。

- 1 奇瑞を記した伝記は、多く存在するが、その中でも中村経年著『日蓮上人一代図会』安政五年(一八五八)刊、は挿絵の作者葛飾為齊の手によって多くの奇瑞や奇怪な構図が取り入れられている。

- 2 『眞実伝』には諸本が伝来しているが、本稿では慶応三年初

幕末・維新时期における日蓮伝記本の一考察(望月)

二四二

夏日『日蓮大士真実伝』光玉堂長門屋亀七刊、筆者蔵、を引用することとする。平楽寺書店版は、大正七年(一九一八)五月八日の初版から昭和十二年(一九三七)六月二十五日の二十一年版まで、二十年間に毎年のように刊行されている。

3 泰堂の生涯や事蹟に関しては、小川雪夫『小川泰堂伝』錦正社、昭和四十二年、冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』平楽寺書店、昭和五十八年等がある。泰堂は医師として、また藤沢市の発展のために数々の業績を残している人物である。

4 『高祖遺文録』は慶応元年(一八六五)から出版されたが、三十巻としてまとまったのは泰堂死後の明治十三年(一八八〇)である。

5 『日蓮宗事典』『日蓮大士真実伝』の項。

6 『日蓮大士真実伝』(光玉堂版)。以下、特に注記しない引用資料は、同伝記とする。

7 井谷明神に関しては、日蓮伝記では不明な点も多く、多くの日蓮伝記には登場していない。

8 『日蓮宗事典』に「小川泰堂は、実際に霊跡の地を探訪し、寺院の縁起や霊跡の伝承を綴り宗門弘通のありさまを提示した。ここから本書は、霊跡伝承めぐりのガイドブックとしての性格を持っている。」とあるように、日蓮の足跡に係する寺院やゆかりの霊跡や場所が本文内に頻繁に登場しているのが特徴であり、小川泰堂の本書にかける姿勢が窺える。

〈キーワード〉『日蓮大士真実伝』、小川泰堂、日蓮伝記、祖師信

仰、挿絵

(身延山大学教授・博士(文学))

新刊紹介

石井 公成 編

『新アジア仏教史10 朝鮮半島・ベトナム 漢字文化圏への広がり』

A五版・四五六頁・本体価格四、〇〇〇円
 佼成出版社・二〇一〇年五月